

成分名	カアトレジン
英名	
CAS No.	—
収載公定書	—

投与経路	用途
筋肉内注射	保存剤
局所皮内注射	
その他の注射	
注腸	
吸入剤	
耳鼻科用剤	
直腸, 膣, 尿道に適用	

以下については該当文献なし

1. 単回投与毒性
2. 反復投与毒性
3. 遺伝毒性
4. 癌原性
5. 生殖発生毒性
6. 局所刺激性

#### 7. その他の毒性

① Myristyl-gamma-picolinium chloride(MGP)は関節内ステロイド療法に使用される酢酸メチルプレドニゾロン懸濁剤の新しい構成成分である。正常犬の滑膜絨毛の器官培養におけるヒアルロン酸合成は MGP の添加濃度に比例して低下した。同様に MGP による用量依存的な Na<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>-グルコサミノグルカン合成の抑制がイヌの関節軟骨の器官培養において見られた。一方、培養大腿関節丘の軟骨では、MGP によるグルコサミノグルカン合成抑制に対する感受性は弱かった。MGP 又はその溶媒をイヌの膝関節内に注射し、その 4 時間後に膝軟骨と滑膜を取り出して実験に供したところ Na<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>-グルコサミノグルカンの合成は、MGP 処理した関節から調整した軟骨と、反対側に溶媒を処理した関節から調整した軟骨の器官培養で、両者間に差は認められなかった。しかし、5 匹のイヌのうち 4 匹では MGP 処理した関節から得た滑膜の方が反対側の溶媒のみを処理した関節から得た滑膜よりも器官培養によるヒアルロン酸合成は有意に低下していた (P<0.05)。MGP 処理関節から得た滑膜には食作用が残っていた。これらの知見は臨床的に関連する濃度の MGP は局所でのヒアルロン酸合成を抑制し得るということである。しかし、正常な関節

軟骨への影響は少ししかない。<sup>1)</sup> (Myers & Stack, 1988)

② ウサギの眼硝子体に種々の濃度の Myristyl gamma-picolinium chloride (MGP) を注射し、光顕レベル及びグリアの線維性酸性蛋白(GFAP) を指標に、MGP の網膜に対する傷害性を検討した。MGP 注射の約 1 ヶ月後の検討したウサギ網膜には、光受容体の喪失と注射部位に近傍の網膜に希薄化が認められた。注射部位から離れたところの網膜は正常若しくは極軽度の影響が見られるに過ぎなかった。細胞免疫化学による検討では、網膜全体的にグリア細胞内に GFAP の存在が認められた。MGP 注射後比較的短時間後(24 及び 72 時間後)では、注射部位近傍に重篤な形態学的変化が認められ、ERG (網膜電位図) の所見と平行であった。GFAP は検出されなかった。Depo-Medrol (Upjohn, Kalamazoo, MI) で防腐剤として用いられる MGP はウサギの網膜に対して毒性が強い。<sup>2)</sup> (Zemel et al., 1993)

## 8. ヒトにおける知見

該当文献なし

## 引用文献

- 1) Myers SL, Stack S. Myristyl-gamma-picolinium chloride suppress cartilage and synovial membrane glycosaminoglycan synthesis. J. Lab. Clin. Med. 1988; 111(2): 203-10
- 2) Zemel E, Loewenstein A, Lazar M, Periman I. The effects of Myristyl gamma-picolinium chloride on the rabbit retina: morphologic observations. Invest. Ophthalmol. Vis. Sci. 1993; 34(7): 2360-6